

1 宗教とは何か1 - 1 : 古典的宗教哲学とその限界1 - 2 : 意味論から宗教論へ1 - 3 : 究極的関心・深みの次元・自己超越性2 近代世界と宗教 - なぜ宗教か -2 - 1 : フォイエルバッハ問題2 - 2 : 現代神学とフォイエルバッハ2 - 3 : 宗教的实在論

1. 素朴实在論 / 批判主義 / 非实在論 / 批判的实在論

科学と宗教との並行関係

2. 超自然主義 / 自然主義 / 批判的宗教論

神・究極的实在と人間との絶対的差異とは何か。

自然主義による批判の真理性：神は物ではない

自然主義の限界：神は単なる投影・幻想ではない

3. 宗教批判としての批判主義・非实在論・自然主義

宗教批判の問題は、宗教的实在論とそれに対する批判として捉えることができる。

宗教批判と宗教的实在論の問題を、言語論として捉えること。

4. 宗教言語の意味 (Sinn, meaning) と指示 (Bedeutung, reference)

5. 宗教言語、とくに隠喩表現 (「神は父である」、あるいはテキストレベルでのイエスの譬え) の指示の問題として論じること。

6. 宗教言語・隠喩は、自己指示的 (指示が存在しない) あるいは情動の表出である。

宗教言語は指示を持ちうるか。

第一度の指示と第二度の指示の区別。

内的現実と外的現実との相関に基づく第二度の指示の開示

単なる外的实在でも単なる主観的な幻想でもなく、相関においてそのつど生成し共同体において共有される現実

3 宗教的多元性の諸問題3 - 1 : 宗教の神学

「複数の宗教が存在する中で、なぜこの宗教なのか」

・「宗教の神学」の背景としての宗教的多元性

グローバル化と多元化、エキュメニズム、第二バチカン公会議、宗教間対話

ポスト・コロニアルの状況

- ・排他主義、包括主義、多元主義 1、多元主義 2
- ・諸宗教の共通性を論じる根拠は何か？
 - 人間性？ 宗教の概念規定の問題に戻る
 - 機能的な共通性にとどまるのか、実体的な共通性までも主張するのか。
 - cf. 教派的多元性
- ・包括主義は広範に見られる。その前提は何か。
 - 諸宗教の共通性の意識（少なくとも宗教的問い・欲求の共通性）、方法論的現在中心主義から形而上学的現在中心主義への暗黙の移行
 - 普遍救済論の問題 cf. 予定説

(1) 宗教史とキリスト教思想

- 1 . 問いとしての宗教史の前提、なぜ現在の宗教多元性の状況下で宗教史なのか
 - 宗教学と宗教史・比較宗教論
 - 聖書学と宗教史学派
 - 世界的諸宗教と出会い
 - cf. 否定的な克服されるべきものとしての諸宗教
- 2 . 宗教史をキリスト教神学としていかに論じるか
 - 諸宗教の一つとしてのキリスト教、宗教史の現象としてのキリスト教
 - 宗教概念の神学的意義 「宗教とは何か」
- 3 . 初期ティリヒにおける宗教史の問題、シェリングの積極哲学 cf. 消極哲学
 - 神話と啓示の哲学（神話論的過程 / 合理的過程 / 啓示）
 - 神話論における神々の交代過程 = 人間精神の展開過程
 - 神話から文化・自律性へ
 - 人間存在における諸原理（意識と無意識）の対立と啓示による克服
 - ユダヤ教 / キリスト / 教会史
- 4 . 宗教史・精神史という枠組み 政治、文化の歴史と現状の解釈
 - 未分化（ sacramental ） / 分化（神律の内的緊張） / 分裂（神律の解体）
 - / 対立（自律と他律） / 自律の平板化と新しいデモーニッシュなもの危機
 - / 新しい神律の探求

(2) 啓示史

- 5 . 宗教史の前提としての啓示史
 - 宗教：宗教的実在への問いとその受容の経験
 - 啓示：宗教的実在の顕現 啓示相関
 - 啓示の歴史性
 - 準備 - 中心 - 受容
 - 終極的啓示：準備 成就
 - 受容 終末的実現
- 6 . 歴史を構成する原理としての中心（意味付与原理、歴史意識の構造）

カイロス

中心 始原と終局 意味連関

7. キリスト教的啓示史

イエス・キリストの出来事 = 歴史の中心

8. 偉大なるカイロス（質的な時、決定的な時、転換点）と諸カイトイ

諸宗教の位置

9. 終局における宗教の止揚（宗教史のテロス）

宗教と文化の対立と宗教間の区別との克服

宗教における宗教の克服、

宗教批判を自らの内に組み込んだ宗教

「わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。この都には、それを照らす太陽も月も、必要ない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。」(ヨハネ黙示録 21.22-23)

(3) 類型論と比較宗教学 - 宗教史の神学の内実 -

1. 宗教史に登場する諸宗教の相互関係をいかに整理するのか。

類型論：宗教という類の中にいくつかのパターン（種）を設定する。

cf. パンベルクの批判、宗教の個別性と歴史性

2. 宗教史か現象学的類型論か、通時と共時との相補性

普遍史は可能か

人類の諸歴史の一つの意味連関として包括することは可能か、いつから可能な自
体になったのか（グローバル化のプロセス）

3. 歴史的諸現象の個別性の理解を目指した理解の方法論

cf. 生の個別性はカオスである

4. 研究者の視点によって様々な類型論がある

ティリッヒ：宗教史の枠組み（神律・自律・他律）での類型論 動的類型論

・ sacramentalな精神状況、預言者的批判、神秘主義的批判、合理主義的批判

・ 一神教、多神教、三位一体論

5. 人間存在の構造分析 類型論相互の関係づけ、類型論の基礎付け

距離と参与

存在の聖性と当為の聖性、

具体性と究極性

神秘主義

倫理的類型、預言者的類型

6. 類型論から実定的諸宗教の比較

何のための比較か

キリスト教と仏教：人間存在の究極目標の象徴化という点での比較

神の国と涅槃

参与の原理と同一性の原理との対比

個別性

それぞれの宗教の強調点の対比

それぞれの伝統内部における再発見

より適切な宗教理解を目指して

(4) 対話と宣教 - 宗教的多元性時代の宗教 -

7. 宗教間対話の諸ルート

相互の伝道活動 / それぞれの宗教を構成的に組み込んだ文化を通して / 個人的出会い

8. 個人的出会いにおけるコミュニケーション = 理想的発話状況

- ・相手の価値を相互に承認し合うこと
- ・対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること
- ・共通基盤の存在
- ・相互批判に開かれていること、自己批判・自己理解へ

9. 対話の不毛 (対話のルーティンワーク化・セレモニーとしての対話) な限界を超えて
対話の必然性、対話の可能性、対話の現実性

10. 諸宗教間に閉じない対話であること、世俗化時代以降の宗教間対話の意義

非宗教的立場との共通の課題

下からの公共性構築の場としての宗教間対話

11. 対話は宣教と両立するか

12. 伝道タイプの宗教としてのキリスト教

< マタイ福音書 >

28:16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。17 そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

13. 実践的な証明

正当な競い合い

カブ、他宗教による真性の宗教性への目覚めをお互いに喜び合うこと

< 文献 >

1. 古屋安雄 『宗教の神学』ヨルダン社
2. 星川・山梨編 『グローバル時代の宗教間対話』大正大学出版会
3. 藤倉恒雄 『ティリッヒの神と諸宗教』新教出版社
4. Pan-Chiu Lai, *Towards a Trinitarian Theology of Religions: a Study of Paul Tillich's Thought*, Kok Pharos Publishing 1994
5. Kin Ming Au, *Paul Tillich and Vhu Hsi. A Comparison of Their Views of Human Condition*, Peter Lang 2002
6. ティリッヒ 『宗教の未来』聖学院大学出版会
7. 藤原聖子 (2001) 「空転する「対話」メタファー」、『宗教研究 特集：近代・ポスト近代と宗教的多元性』(日本宗教学会) 第75巻 - 329、123-148頁。